

おきなわ・海歩き 第1回
うみあっちゃーになろう！

鹿谷麻夕（しかたに・まゆ）

青い海、白い砂浜、輝く太陽……夏の沖縄のイメージは、こんな感じでしょうか。私も沖縄に来るまでは、こんな想像をして憧れていました。では実際はどうなのかというと、これが実にその通りの場所があるので、嬉しくて思わず頬がゆるんでしまうほどです。飛行機が島に着くと、太陽の光のまぶしさ、本土とは違う植物たち、そして何ととっても海の色的美しさに眼が奪われます。

沖縄の海には、スキューバダイビングのために多くの人を訪れます。透明度の高い海と美しいサンゴ礁の生き物たちは、やはり沖縄ならではの体験することができません。またホテルのビーチは白砂が美しく、管理も行き届いて安心ですが、生きたサンゴや生き物たちはあまり見かけません。海に潜らず、子供も一緒に、サンゴ礁の生き物に出会うことはできるのでしょうか？

沖縄では昔から、漁師のことを「うみんちゅ」とか「うみあっちゃー」と呼びます。直訳すれば、うみんちゅは海の人、うみあっちゃーは海を歩く人となります。サバニと呼ばれる沖縄の伝統的な小船ですいすいとサンゴ礁の上を渡る漁師もいれば、なるほど干上がったサンゴ礁の上を実際に歩いて、タコや貝を採る、文字通りのうみあっちゃーもいます。このような潮干狩りは、女性や子供にもできる海遊びでもあります。沖縄では旧暦の3月3日（4月上旬）^{はまう}浜下り^{うが}といって、浜で^{うが}拝み（お祈りのこと）をし、潮の引いた海に出て海の恵みを採集するという行事が今でも行われています。（浜下りには女性が身を清める意味があるといわれますが、地域によって多少異なるようです。）

このような海歩き、うみあっちゃーを、旅行者でも楽しめるようなプログラムがあります。皆さんはエコツアーという言葉をご存知でしょうか？ エコツアーは最近注目を集めている旅行形態で、従来の大型バスで行くような観光地巡りではなく、その地域の自然環境や暮らしに直接触れることのできる体験型のツアーです。どちらかということと自然の中での冒険的なイメージが大きいようで、沖縄でも、西表島のマングローブの中を流れる川のカヌーツーリングや、やんばるの亜熱帯の森のトレッキングなどが人気です。しかし最近では、海歩

きも「リーフトレイル」や「リーフトレッキング」などという名前で人気のメニューの一つになってきました。

さて、うみあっちゃーにはどんな準備がいるでしょうか。まず、帽子と日焼け止め。これは必携です。沖縄の太陽は本当に日差しが強く、日焼けはあっという間に「やけど」になってしまいます。服装も、できれば長



都会の目の前でサンゴ礁の観察会。

袖・長ズボンがいいですね。濡れてもいいつもりで潮だまりにジャボジャボ入っちゃいましょう。足元は、海ならサンダルやゾーリ？ これはNG。濡れると足が履き物から滑ってずれるので、サンゴや貝殻やウニのトゲでケガをしやすいのです。濡れてもいいお古のスニーカーでじゅうぶんですから、足をちゃんと覆う形の靴を履きましょう。最近はカッコいいアクアシューズもありますね。岩をひっくり返してみたいときは、軍手があると便利。でも危なくない生き物は、ぜひ素手で感触を確かめてみてください。それから、飲み水とあめ玉。炎天下で脱水症状を起こさないように水筒を持っていきましょう。疲れたら甘いものを口にすると元気が出ていいですよ。

さあこれで準備は万端……？ いえ、出かける前にチェックしなければならぬことがあります。潮の干満の時刻です。潮位表はありますか。新聞にも載っているけれど、釣具店などに置いてあるものが便利。何せ沖縄の潮の干満差は、大潮時には2メートルもあります。海歩きができるのは、大潮の干潮時刻の前後2時間くらい。しっかり時間をチェックしないと、気がついたら岸に近いほうから潮が満ちてきたりするのがサンゴ礁の怖いところです。危険な生き物のことは知っていますか？ 実は猛毒を持つ生き物もサンゴ礁にはたくさんいます。知らなかったでは済まされません。

うみあっちゃーもこれでは結構大変そうですね。でもこれを楽しめる方法が一つあります。そう、地元の海に詳しいガイドと一緒に歩くこと。安全の上ではもちろんのこと、自然の中にうまく隠れている生き物を見つけたり、地元の

呼び名やおもしろい生態の解説をしてもらえば、楽しさが何倍にもなるでしょう。

私は暖かな南の海の生き物に惹かれて、沖縄島に移り住んでいます。これから、海でつけた豊かで不思議な生き物たちをご案内していきましょう。



沖縄の干潮差は大きい。満潮時（上）はリーフの内側も水面下に沈むが，干潮時（下）にはリーフ近くまで歩ける。